

北海道の竖穴群の概要

平成 30 年 9 月

北海道教育委員会

目 次

1 はじめに 1

2 竪穴群の調査 3

3 竪穴群の分布と年代 10

4 竪穴群の特徴 16

5 竪穴群の保護 19

6 おわりに 23

例 言

- 1 本資料は、北海道教育委員会が平成 27 年度から平成 29 年度まで実施した「北海道東部の竪穴住居跡群調査 第 1 次調査」の一環として、調査の対象となる竪穴住居跡群（以下、竪穴群と略称する）の概要を説明とする目的で作成したもので、平成 28 年 4 月に公開した『北海道の竪穴群の概要（暫定版）』の改訂版である。
- 2 本資料の執筆・編集は、北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課に所属する以下の文化財保護主事が分担して行った。
赤井文人 内田和典 工藤研治 中田裕香 永谷幸人 西脇対名夫
藤原秀樹 宗像公司 村本周三
- 3 本資料の作成にあたり、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターの協力を得た。

北海道史年表

本州の時代区分	年代（西暦）	北海道の時代区分	
旧石器時代	30,000B. C.	旧石器時代	
縄文時代	13,000B. C.	縄文時代	
	草創期		草創期
	早期		早期
	前期		前期
	中期		中期
	後期		後期
晩期	1,000B. C.	晩期	
弥生時代	300B. C.	続縄文文化期	
古墳時代	300A. D.		
飛鳥時代 奈良時代			
平安時代	800A. D.	オホーツク文化期	
鎌倉時代	1,200A. D.	擦文文化期	
室町時代		中世	
江戸時代	1,600A. D.	アイヌ文化期	
近代	1,900A. D.	近代	
現代		現代	

北海道教育委員会 HP「北海道史年表」を一部改変

1 はじめに

(1) 竪穴群の調査に至る経緯

北海道の東部では、先史時代の竪穴住居跡が埋まりきらずに地表面に窪みの状態として確認することができる遺跡（以下、竪穴群と略称する）が多く見つかっている。この中には、数百箇所から 2,000 箇所もの竪穴が密集して分布する大規模な竪穴群も存在する。本州以南ではこのような大規模な竪穴群は見つかっておらず、北海道と同規模の竪穴群を探すならば、サハリン、南千島などのオホーツク海南側周辺、またはロシア極東地域などで、竪穴群はこの地域に固有の遺跡と言えるだろう。



図1 国指定史跡 標津町標津遺跡群（残雪部分が窪みで残る竪穴住居跡群）

日本国内において最大規模の竪穴群といえば、北見市の常呂遺跡及び標津町の標津遺跡群である。北海道東部の自然景観の中に、先人達が繰り返し竪穴住居を造って生活を営んだ痕跡が良好な状態で残されており、両遺跡とも国の史跡として保護され、調査研究や公開活用が進んでいる。このことから、平成 18・19 年度、北海道・北見市・標津町は共同で二つの遺跡について日本の世界遺産暫定一覧表に記載するよう申請した（[竪穴群の提案書詳細リンク](#)）。審査の結果、「北海道の寒冷気候のために独特の可視的な遺存状況を示す考古学的遺跡であり、7,000 年にわたる人類と自然との調和の過程を示す考古学的遺跡として、価値は高い」との評価を得た。しかし、この提案は、暫定一覧表記載には至らず、記載の候補として評価されるに止まった。提案の主題・構成資産の再検討、北海道オホーツク海沿岸に広く展開する同種の考古学的遺跡との更なる比較研究等が必要で、世界遺産登録の条件となる「顕著な普遍的価値」の証明が課題とされた。（[調査・審議結果の詳細リンク](#)）

暫定記載に至らなかった事実は、従来の竪穴群保護の取り組みになお推進の余地があり、その価値の普及啓発を進めることが必要であることを示していると言える。北見市、標津町では、提案以降も発掘調査や史跡整備を継続して実施し、各遺跡の内容の理解を着実に進めている。北見市は東京大学と共同で「世界遺産と常呂遺跡」をテーマとした講演会・展示会を実施するなど、市民に対し普及啓発活動を行っている（[北見市とこころ遺跡の森・ウェブサイトのリ](#)

ンク)。標津町は、世界遺産関係の講演会・展示会を開催するなど、調査研究や普及活用事業を実施している（[標津町ポー川史跡自然公園ウェブサイトのリンク](#)）。

(2) 北海道東部の竪穴住居跡群調査

竪穴群の文化遺産価値を示すためには、まず、その全体像を把握することが不可欠である。北海道内の竪穴群に関する基礎的な情報を整備することは、地域の文化財保護に責任を有する地方公共団体が主体的に取り組んでいくべき課題であり、一部の市町村では積極的な取り組みが認められるが、文化財保護の体制が整っていない市町村も多いのが現状である。北海道内各地の竪穴群を網羅し、一定水準の基礎資料を整備することは、北海道教育委員会の取り組むべき課題であると考えられる。

そこで、北海道教育委員会は、竪穴群の保存活用のための基礎的な資料を整備するため、北海道東部の竪穴住居跡群の調査を開始することとした（[北海道東部の竪穴住居跡群調査計画のリンク](#)）。平成 27 年 9 月に「北海道東部の竪穴住居跡群調査 第 1 次調査実施計画」を策定し、平成 29 年度までの 3 カ年でオホーツク海沿岸に面する地域を重点的な調査対象とした。調査計画は、広範囲に所在する竪穴群の基礎的な情報・現状を把握することを目的とした「総合調査」、及び特定の遺跡を選定し、詳細な調査を実施する「個別調査」で構成した。総合調査では竪穴群の全貌を捉えるため、データベースの作成を一つの柱とし、北海道に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地の情報が記載された包蔵地カードを基に、竪穴群の調査履歴・文献等の情報を集約した。まず、オホーツク・宗谷・留萌管内のデータを収集し、これに基づき本概要で検討を行っている。さらに、現地調査を行い、興部町・湧別町に所在する竪穴群を対象に遺跡の保存状況等を確認した。平成 28・29 年度には「北海道東部の竪穴住居跡群調査懇談会」を開催し、有識者の専門的な見地からの意見を求め、調査内容に反映した（[懇談会概要のリンク](#)）。個別調査では、北海道立埋蔵文化財センターが湧別町の道指定史跡「シブノツナイ竪穴住居跡」を調査し、この調査成果により遺跡の保護に必要な基礎的な情報が整備された（[北海道史跡「シブノツナイ竪穴住居跡」の新しい調査のリンク](#)）。

平成 30 年度からは、引き続き第 2 次調査実施計画を策定し、4 カ年をかけて調査をさらに推進・継続させる予定である。総合調査においては、根室・釧路・十勝管内に所在する竪穴群のデータベースを作成し、1 次調査で作成した情報と統合して分析を行う予定である。現地調査では文献資料等からは得られない、竪穴群の現況や保存状態等を調査する。また、懇談会を各年度で開催し、有識者と意見交換を行うことで調査内容の充実を図る。個別調査では、北海道立埋蔵文化財センターが湧別町の川西 2 遺跡及び興部町の道指定史跡「興部豊野竪穴住居跡」を調査する計画である。

この「竪穴群の概要」は、上記の竪穴群調査の一環として、竪穴群の調査・研究の来歴、遺跡の分布・性格について北海道教育委員会としての見解をまとめ、広く一般に周知し、その理解を助けることを目的として、公開するものである。

2 竪穴群の調査

(1) 竪穴群への関心の芽生え

ロシア帝国の東方への領域拡張は 17 世紀末にカムチャツカに達し、18 世紀後半にはそこから南下して毛皮貢納を要求するロシア人と南千島のアイヌとの間に紛争を生じるまでになった。江戸幕府はロシア人の進出に対抗して、それまで原則アイヌの自治に任されてきた地域を日本の政権が管理することをめざし、天明 5 (1785) 年以降、当時蝦夷地と呼ばれたこの土地へ官吏を派遣して調査を行うようになった。この時期に広く蝦夷地を歩いた最上徳内は恐らく北海道の竪穴群に初めて注意した人物のひとりで、アイヌの間に伝わる「コロブクングル」という異民族の伝説とともに、その住居跡とされる方形の竪穴が各地にあることを紹介している (最上 1808)。約半世紀後、蝦夷地の探検家として知られた松浦武四郎もまた、アイヌが「コロコクンクル」の家跡と伝える竪穴を各地で見たが、彼は樺太でアイヌが冬季に竪穴住居に住んでいることを見知っていたので、北海道の竪穴群は伝説上の民族ではなく、北海道のアイヌ自身がかつて竪穴住居に住んでいたことを示すものと考えた (松浦 1861)。しかしその後日本が急激な近代化の時代を迎えて、西欧風の学術の視点から専門家が竪穴群について議論するようになっても、松浦のようにそれを古代の集落跡・住居跡として即物的に理解する方向の研究は容易に進まなかった。

工学寮 (後の東京大学) の教師として日本政府から招聘された英国人ジョン・ミルンは、自ら北海道・千島を訪れて北千島のアイヌが竪穴住居に住んでいることを報告したが、だからと言って北海道の竪穴も古代のアイヌが残した、とは考えず、かつてアイヌが日本の広い範囲に住んでいたが、南から進出してきた日本人に追いやられて竪穴住民 *koro-poku-guru* の住む北海道に侵入し、これに追われた竪穴住民はカムチャツカ方面へ去った。北千島の竪穴住居はこの民族の風習が残ったものである、という複雑な主張を展開した (ミルン 1882)。新たに建設された都市札幌で西欧風の教育を受け、その近郊の竪穴をはじめて東京の専門雑誌に紹介した渡瀬荘三郎も、竪穴を残したのはアイヌと違って土器を持つ民族「コロボックル」であり、この民族はかつて本州にまで住んでいたとの解釈を示した (渡瀬 1886)。こうした主張が東京大学で人類学教室主任の地位にあった坪井正五郎に採用され、北海道や千島に竪穴を残した民族こそ日本の石器時代住民であるとする、いわゆる「コロボックル説」 (坪井 1887a・b) が 19 世紀末に広く普及することになるが、坪井自身は北海道の竪穴を詳しく調査したことはない。

当時の研究者たちの関心は、文献に残る古代人と「蝦夷」との接触の記録に、さらにアイヌの伝承を接ぎ足して、日本列島の住民に関して先史時代にまで遡る見通しを立てることにあり、民族としての「日本人」はいつからここに住んでいるか、という疑問に答えることが研究の大きな目的だった。その際、アイヌが先住者で「日本人」が后来者である、という単純な結論より、アイヌもまた先住者を駆逐した、という説明が選ばれたことは注目に値する。いずれにせよ北海道の竪穴群は、まずこうした列島住民の交代を示す可能性をもつ遺跡として国内の関心を集め始めた。

しかし「コロボックル説」の寿命は短かった。明治 32 (1899) 年に坪井自身が北千島調査のために東大人類学教室から派遣した鳥居龍蔵は、千島アイヌが最近まで竪穴住居に住んで石器を用いたこと、土器については製法までも詳しく記憶されていることを報告し(鳥居 1903)、竪穴住居跡や土器を残した民族はアイヌでないという「コロボックル説」の前提は大きく揺らぎはじめた。北海道庁に属してアイヌ研究を進めていた河野常吉は、以前から竪穴の少なくとも一部はアイヌが残したものと推測していたが、明治 41 (1908) 年に発表した「非コロボックル論」の中で、享保 6 (1716) 年、漂流した日本人船員がトカチで「穴居人」に救助されたという記録があることなどを挙げ、18 世紀初めまで本島(北海道、国後、択捉)アイヌも竪穴住居を使用していたと結論した(河野 1908)。

このように明治年間の終わりとともに、北海道の竪穴は先住民族の痕跡というよりかつてのアイヌの住居跡であるとの理解が有力になり、半世紀前に松浦武四郎が考えたように竪穴群を北海道の古代史を示す遺跡ととらえることがようやく可能になった。しかしこの理解は、歴史時代のアイヌ(17 ないし 18 世紀以降)の直前まで道内で竪穴住居や土器・石器を使用した生活が行われていたという誤解と抱き合わせになっていた。北海道の短い歴史時代の直前はいきなり底知れぬ古さの石器時代に続くことになり、そして一度は竪穴を介して本州の石器時代に関係づけられた北海道の遺跡が日本列島の歴史のうえで持つ意味は、再び不明に帰してしまった。

(2) 在野の考古学的調査

東京の学界で「コロボックル説」をめぐる議論が華やかであったころ、北海道初の中学校である北鳴学校の教師であった高畑宜一は石狩川流域の古代遺跡を精力的に踏査した。明治 26 (1893) 年に新十津川村で竪穴を発掘し、土器、土製紡錘車、鉄屑の付着した土製の轆(ふいご)の口等を発見して報告した際には「北海道ノ竪穴遺跡ハ草味野蠻ノ石器時代ヲ脱シテ鐵器時代ニ進歩発達セシ人種ノ手ニナリシト信ス」と結論し、竪穴が石器時代のものではないことを指摘した(高畑 1894)。同じころに高畑が作成した札幌市内の竪穴分布図は市街化によって失われる前の竪穴群の様子を示す貴重な記録であり、現在札幌市の指定文化財となっている(羽賀 1975)。旅行者の見聞記に始まった竪穴群の記録は、こうして 1 世紀を経て在野の研究者による考古学的調査へと発展したが、その成果は河野常吉のような文献史学や民族学にも詳しい専門家の認識には容易に反映されなかった。

しかし高畑の試みから 30 年以上を経て、考古学固有の成果は次第に独自の発言力を持つようになった。網走で理容業の傍ら考古学研究を続けていた米村喜男衛は昭和 7 (1932) 年、発掘の成果に基づいて網走の先史土器が厚手縄紋土器→薄手縄紋土器→刻紋土器の順に変遷することを述べ(米村 1932)、今日認められている縄文土器→続縄文土器→擦文土器の推移にあたるものを正しく把握した。これより先、新岡武彦は米村の言う「刻紋土器」にあたるものを「擦紋式土器」と名付けている(新岡 1930)。今日まで用いられる「擦文」という用語の初出である。河野常吉の子息で森林害虫の研究者であった河野廣道は米村の発

表の翌年、自らの発掘成果を踏まえて「擦紋土器群」について「北海道に於ける金石併用時代から、金属期時代に亘る文化相を代表する土器群であって、北海道全道、樺太南部、千島南部等に分布している。本州の祝部陶器土師器期時代に相当するもので、普通蕨手刀その他鉄器と共に発見され、(中略) 北海道の表面の凹んだ堅穴から発見される土器は大部分この形式に属する。」と概説し、堅穴群の年代とその文化、本州文化との対比について明確な見通しを示した(河野 1933)。札幌の小学校教師であった後藤寿一がやや遅れて発表した研究結果も河野の理解とほぼ一致していた(後藤 1934)。また同じころ「オホーツク海沿岸文化の石器時代後期から金属期時代に亘る文化を代表する」「オホーツク式土器群」や、「最も新しい土器で(中略) 内耳鉄鍋が移入されてから、これを模造したものと思われ」る「内耳土器群」が認識された(河野 1932)。

こうして昭和の初年までに、道内の考古学者たちは堅穴群の多くが石器とはほぼ縁のない、しかし江戸時代よりはるかに古い擦文土器の時代のものであることを示したが、堅穴住居が相当新しい年代まで用いられたという従来の理解には訂正を加えなかった。これには当時、邦領内にあった樺太や北千島における堅穴群の考古学調査が進み、それらが 19 世紀まで用いられていたことが確かめられたことも影響しているであろう(馬場 1939a・b)。

これより少し前、大正年間には、本州以南で弥生土器の時代が縄文土器の時代に後続することが確認され、昭和の初めにかけて縄文土器の詳しい年代の区別が精力的に研究された。こうした編年研究の代表的な推進者であった山内清男は「北海道では縄紋式以後にも縄紋の多い型式が続いている。この式を私は近年続縄紋式と云って居り、若干の型式に細分し得るようである。」(山内 1939) と述べ、縄文土器終焉のあとの本州以南と北海道以北の歴史の歩みに大きな違いがあることに注目した。1960 年代以降、山内が用いた「続縄文」という言葉が縄文土器の時代と擦文土器の時代の間位置する文化の名称として道内でも普及し、「オホーツク式土器」の文化についての研究の進展とあわせて、北海道とその隣接地域の先史文化を主に考古学の枠組みによって理解する作業が発展していく。

(3) 学術調査の展開

昭和 20(1945)年の敗戦により日本の歴史研究から思想的な統制が大幅に取りはらわれ、より客観的な先史・古代研究の手法として考古学に多くの期待が寄せられた一方、それまで日本の海外進出に伴いアジアの遺跡研究に従事していた考古学者が国内に調査研究の場を求めようになった。米村喜男衛が大正年間に発見した網走市最寄貝塚で昭和 22・23・26 (1947・1948・1951) 年、東京大学や北海道大学の研究者を含む調査団が発掘調査を行ったことはそうした戦後の情勢をよく象徴しており、オホーツク式土器を伴う堅穴住居の構造をはじめ明らかにし、海洋に適応し大陸とも交流をもつユニークな文化の性格を明確にする成果を挙げた(駒井編 1964)。それまで主に在野の研究者が調査を進めてきた堅穴群は、職業的な考古学者にとっての重要な研究対象と理解されるようになる。

昭和 27 (1952) 年には北海道大学の調査団が同大学構内に所在する 83 軒の堅穴住居跡

の分布図作成や発掘調査を行い（北大調査団 1955）、昭和 35（1960）年からは東京大学が常呂町（現在の北見市常呂町）の大規模な竪穴群で発掘調査を開始した（大西 1972、駒井 1963）。東大による同地の竪穴群の調査は現在に至るまで 60 年にわたって継続され、特に昭和 40（1965）年の文学部常呂研究施設の開設は、竪穴群の考古学とこれに関連する研究を目的とした国内唯一の研究機関の登場として大きな意味を持っている。昭和 42（1967）年から 45（1970）年にかけて行われた測量調査の結果、遺跡周辺の航空測量図と合成した竪穴群の分布図が公表され（東京大学文学部考古学教室 1972）、竪穴群の現況記録の規範を提供した。また、東京教育大学及び筑波大学も北海道の竪穴群を継続的な調査の対象に選び、根室市内に所在する大規模な竪穴群で昭和 37~39（1962~64）年（八幡ほか編 1966）、また根室市及び標津町に所在する竪穴群で昭和 43~50（1968~75）年（岩崎・前田編 1980）、そして天塩町天塩川口遺跡では昭和 54~56（1979~81）年に竪穴群分布図の作成や発掘調査を行った（天塩町教育委員会編 1982）。昭和 37 年以降の根室市弁天島遺跡の調査は、その後地元の北地文化研究会に引き継がれて平成 20（2008）年まで継続し、オホーツク文化期竪穴群のほぼ全域を発掘するに至っている（根室市教育委員会編 2017 ほか）。

こうした学術調査の結果、まず昭和 30 年代の半ばまでには、擦文土器を伴う竪穴住居と東日本の古墳時代以降の竪穴住居の類似が認識され、竪穴群はアイヌ文化へと連なる北海道の文化が本州古代文化の強い影響を被ったことを示す遺跡として新たに捉え直されることになった（駒井 1959、大場 1959）。東大常呂研究施設の藤本強らは擦文土器の詳しい変遷を明らかにしたうえ（東京大学文学部考古学教室 1972 ほか）、これによって個々の竪穴の時期を判断し、主に道東地方における集落跡のなりたち、さらには集落を残した人間集団の構成を検討する研究にも取り組み始める（藤本 1979b・1982 ほか）。

職業研究者の調査と並行して、昭和 30~40 年代には郷土史研究会、高等学校の部活動など各種の地域団体が市町村史編さんや社会科研究などの名目で少なからず竪穴群の考古学的調査を行った（図 2）。北海道大学医学部の大場利夫はこうした地域研究の指導者として活躍し、多くの市町村で竪穴群の測量や発掘を実施した（中田 2016）。やがて大場は常呂研究施設設置の翌年、北大文学部に新設された北方文化研究施設に移り、同施設が昭和 41~49（1966~74）年に礼文町香深井 1 遺跡で行った竪穴内堆積物の綿密な発掘調査はオホーツク文化の研究に大きな進展をもたらした（大場・大井編 1976・1981）。同施設は昭和 54~56（1979~81）年に斜里町内でオホーツク文化期や続縄文文化期の竪穴群の測量調査も行っている（大井 1984b）。昭和 46（1971）年に開設された北海道開拓記念館も道史研究を目的に竪穴群の調査に取り組み、昭和 50 年代前半（1975~79 年）の網走市二ツ岩遺跡の発掘調査でオホーツク式土器と擦文土器の年代的な接点を示し、オホーツク文化の作物種子を検出するなどの成果を挙げた（平川・野村編 1982）。

このように、1960 年頃から 70 年頃にかけて道内に竪穴群研究の拠点が整備され、郷土史研究の対象としても竪穴群が重視される状況が生まれた。しかしやがて訪れた学園紛争に象徴される社会の変貌を境に、学術研究が牽引する調査のあり方に変化が生じていく。

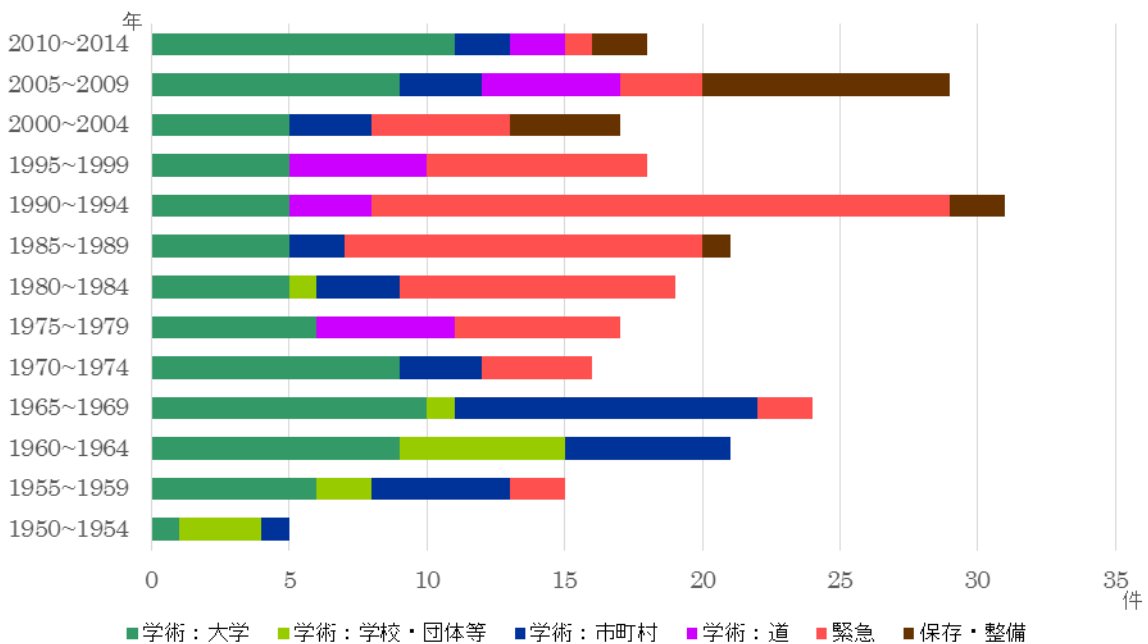


図2 留萌・宗谷・オホーツク管内における竪穴群の発掘調査目的と主体（道教委データベースによる）

(4) 開発への対応

5章でも触れるように、昭和40年代以降道内でも大規模な開発事業が顕著となり、土木工事による埋蔵文化財の破壊が問題となる。昭和50（1975）年の文化財保護法改正では都道府県に土木工事に伴う埋蔵文化財保護について事実上の指示義務が生じ、また全ての地方自治体に発掘調査の権限が付与され、多くの自治体で博物館事業とは別に教育委員会主体の緊急発掘が行われることとなる。

こうして昭和50年代中頃（1980年前後）には、明治以降の耕地化によって既に地表からは確認できなくなっていた竪穴群が緊急発掘で明らかになる例が相次いだ。例えば千歳市末広遺跡では区画整理に伴って106軒、小平町高砂遺跡（図3）では河川改修に伴って208軒の擦文文化期の竪穴住居跡が記録保存され、集落遺跡のほぼ全域が調査されたと考えられる（大谷・田村 1982ほか、峰山・宮塚編 1983、宮塚編 1983）。国道改良のため昭和59（1984）年に発掘された松前町札前第1地点遺跡では、住居跡の形態を比較することにより竪穴住居から平地住居への変遷が想定された（久保ほか 1985）。

このように、従来窪みとして残る竪穴群が注目されてきた道東・道北地方以外の地域で膨大な資料が登場し、それが学術研究にも影響を与え始めた。擦文文化期竪穴群の年代に地域によってかなりの偏りがあることに注目し、竪穴を残した人々の居住する地域が年代を追って大きく変化したとの主張が登場したことはその一例である（大井 1984a）。道東地方でも、昭和53~55（1978~80）年に農地造成のため発掘された斜里町須藤遺跡でオホーツク文化から擦文文化への移行期の様相が具体的に把握され（金盛ほか 1981）、国道改良のため昭和57（1982）年に発掘された羅臼町松法川北岸遺跡では焼失したオホーツク文化の竪穴住居内から発見された炭化した木・樹皮製品（涌坂 2004ほか）などが、平成27（2015）年

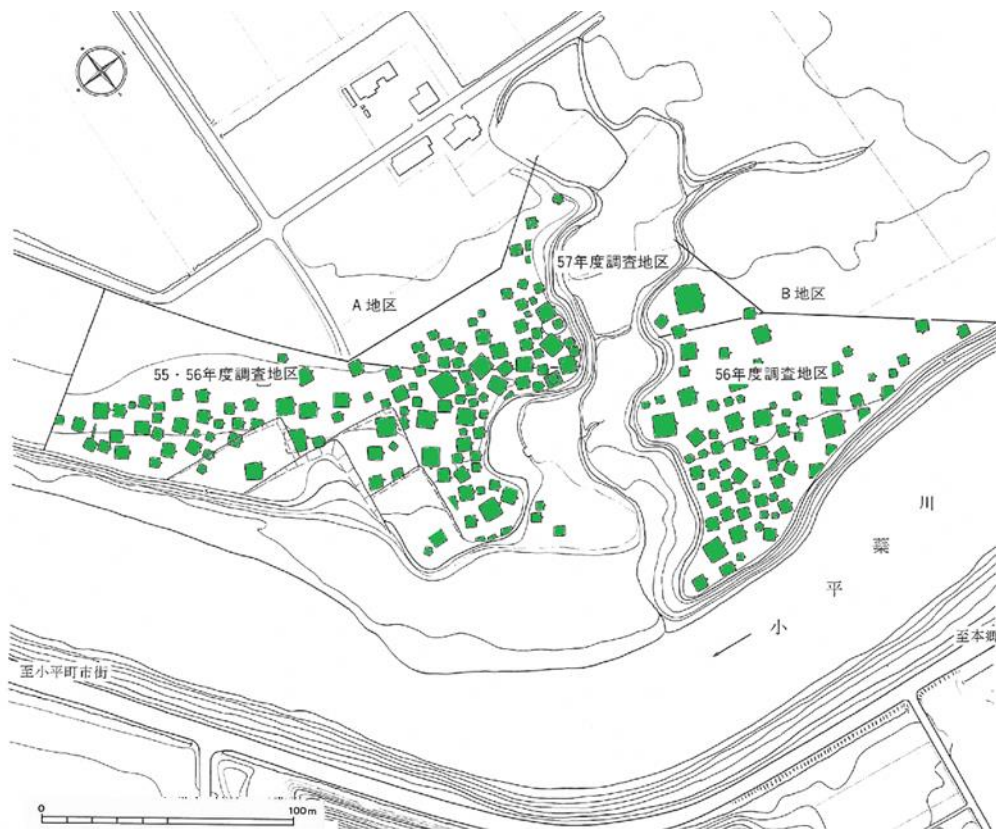


図3 小平町高砂遺跡で発掘された竪穴住居跡群（宮塚編 1983 による）

に至って竪穴群からの出土資料として初めて重要文化財に指定された。その後も、河川改修のため昭和 63（1988）年から数年にわたり常呂町常呂川河口遺跡でこれまで知られていなかった沖積地の竪穴群が調査されたこと（武田編 1996 ほか）、国道建設のため平成 13（2001）年に発掘された根室市穂香竪穴群で擦文文化の末期に住居の形態が変化していく様相が捉えられたこと（財）北海道埋蔵文化財センター編 2003）など、重要な成果が挙げられている。

今後の開発を避ける目的で主要な竪穴群の範囲内容を明確にしようとする作業も大規模な緊急発掘と同時期に始まっている。昭和 50（1975）年には北海道教育委員会が浜頓別町内の竪穴群、浦幌町教育委員会が十勝川最下流部の竪穴群の測量調査を実施した。千歳市教育委員会ではゴルフ場建設計画をきっかけに、昭和 51（1976）年にウサクマイ C 遺跡の地形測量を行った。竪穴住居跡と考えられる窪みが 75 箇所確認され、現在のところ、北海道内に所在する大規模な竪穴群の中では最も南に位置するものと考えられている（西蓮寺ほか 1976）。こうした成果は 5 章で述べるように主要な竪穴群を指定史跡として保存する措置にもつながっていった。

増加を続けていた国内の緊急発掘は、件数では平成 8（1996）年、経費でも同 9 年をピークに横這いに転じたとされる（文化庁文化財部記念物課編 2017 ほか）。北海道でも発掘業務が減少し、自治体に専門的な調査体制を維持することは次第に困難になっている今日、約 40 年の間に各地の自治体に蓄積された出土資料や調査記録を継承し、今後の調査研究に役

立てていくことが課題となっている。かつて、市町村史編纂や社会科学研究のために行われた地域の竪穴群調査が緊急発掘の増加と入れ替わるように減少した際のように（図 2）、地域における竪穴群調査の断絶が再び訪れようとしているようにも思われる。

(5) 近年の動向と今後の展望

東大常呂実習施設は平成 3（1991）年以降トコロチャシ遺跡の調査を行い（東大考古学研究室・常呂実習施設編 2012 ほか）、平成 15（2003）年同遺跡が史跡「常呂遺跡」に追加指定されて以降はこの史跡や網走市の史跡「最寄貝塚」の整備・活用のための発掘（米村編 2009）にも大きく関与してオホーツク文化期の集落や墓地の調査に進展をもたらした。平成 16~26（2004~14）年には千葉大学がオホーツク文化と擦文文化の関係の見直しを目指して標津町伊茶仁ふ化場第 1 遺跡、中標津町鱒川第 3・当幌川 1 遺跡の発掘を行った（千葉大考古学研究室編 2005・2015 ほか）。

標津町教育委員会は平成 15・16（2003・04）年を中心に広大な伊茶仁カリカリウス遺跡の測量調査を進め、平成 21 年度までに史跡「標津遺跡群」に含まれる竪穴群全体の平面図が整備された（梶田編 2011 ほか）。平成 11（1999）年に設置された道立埋蔵文化財センターも幌延町・豊富町の音類竪穴群（2005~09 年）、湧別町シブノツナイ 竪穴住居跡（2015~17 年）を「重要遺跡確認調査」事業の対象に選び、保存を目的に主要竪穴群の現況記録や過去の調査経緯の確認を進めている（(財)北海道埋蔵文化財センター編 2010・公益財団道埋文編 2018 ほか）。

しかし、そうした個別の学術研究や保存・活用事業の及ばない竪穴群は多く、道内竪穴群の全体像、遺跡群としての歴史上の意義や文化遺産としての価値を明確化する作業は必ずしも進んでいない。竪穴群研究の第一人者であった故藤本強教授は 30 年前、「自然との調和を基にして、独自の文化要素を発展させてきた「北の文化」が、長年にわたり日本列島の北端に存在した」と述べ、「北の文化」の持っていた意味を問い直す必要があることを主張したが（藤本 1988）、「問い直す」仕事が当時からどのように進展したか、具体的に説明することは難しい。

かつて、釧路市立郷土博物館は昭和 46~49（1971~74）年に釧路湿原総合調査を行い、湿原周辺に所在する竪穴群等の概要を示した（澤・西 1975）。さらに昭和 51（1976）年からは道東海岸線における遺跡の分布調査を行い、各地の竪穴群について記載した（澤ほか 1984）。こうした総合的な実態把握の試みを改めて全道的に、均一な水準で実現すること、また同時に遺跡群の固有の価値を説明し、地域の文化的向上に結び付けることが今後の調査に求められる課題であろう。そこでは学術研究の成果の整理や他地域の遺跡群との適切な比較により、北海道の竪穴群の特性を明確化することが重要な目標になると思われる。

(2) 竪穴群の年代

竪穴が所在する遺跡の年代

周知資料によると、竪穴が所在する遺跡は、縄文時代から擦文文化期までの各時期にわたる。そのなかで、年代別で最も数が多いのは、擦文文化期として登載されている遺跡で、約 590 遺跡にのぼり、約 1,500 ある擦文文化期の遺跡の約 4 割にあたる。また、竪穴が所在する遺跡は全道で 1,335 遺跡であるから、その半数近くを擦文文化期の遺跡が占めていることになる。擦文文化期以外では、続縄文文化期として登載されている遺跡が約 180 (竪穴が所在する遺跡の約 14%)、オホーツク文化期として登載されているものが約 90 (同約 7%) ある。なお、約 460 遺跡 (同約 35%) については、時代・時期が不明とされており、これらの遺跡の年代について、検討と修正を続ける必要がある。

竪穴住居跡の年代

北海道内では、約 10 年前の集計で 6,000 軒程の竪穴住居跡(地表から窪みが確認されず、発掘調査によって発見されたものを含む)が発掘調査されている(村本 2007)。時期ごとの内訳は、縄文時代が約 4,500 軒 (75%)、続縄文文化期が約 200 軒 (3%)、オホーツク文化期及び擦文文化期が約 1,300 軒 (20%) である。時期の長さ比べて、オホーツク文化期及び擦文文化期の竪穴住居跡が多く、続縄文文化期は少ない。

竪穴の年代

発掘調査が実施された地表で窪みとして確認できる竪穴のなかで、最も古い例は、羅臼町トビニウス右岸遺跡の縄文時代早期(沼尻式)の住居跡の窪みである(羅臼町教育委員会 1978)。縄文時代の住居跡が地表の窪みとして確認できる事例は道東地域に多いが、木古内町幸連 4 遺跡(前期後半)や北斗市矢不來 7 遺跡(後期後葉)など道南地域でも確認されており、かつては道内に広く見られた可能性がある。

なお、竪穴の発掘調査が実施された遺跡は少なく、個別の竪穴の時期は、表面採集された遺物や窪みの平面形等から推定されていることが多い。

オホーツク・宗谷・留萌管内の傾向

オホーツク・宗谷・留萌管内の竪穴群について、文献から得られる情報をもとに道教委が作成したデータベースによると、3 管内で 390 の竪穴群、総数約 10,300 箇所の竪穴が抽出された。このうち、竪穴が発掘調査された事例は、オホーツク管内で 43 遺跡 348 箇所、宗谷管内で 20 遺跡 74 箇所、留萌管内で 6 遺跡 28 箇所ある。

発掘調査によって明らかになった竪穴(住居跡)の平面形及び各文化の住居に特徴的な施設の有無、床面から出土した土器ごとの軒数を図 5 に示す。なお、竪穴住居跡の時期は、床面から出土した土器から推測することができる。また、竪穴住居跡の平面形やカマド、炉などの施設は、各文化によって異なり、縄文時代は平面形が円形、続縄文時代は舌状の張出部が付属する、擦文文化期は平面形が方形でカマドを有し、オホーツク文化期は平面形が五・六角形で石組炉と骨塚(動物骨の集積)を有するという傾向があり、これらも竪穴の時期を知る手がかりとなる(擦文文化とオホーツク文化の竪穴住居については次章でも紹介する)。

図5をみると、宗谷・留萌管内で発掘調査された竪穴の大半は、方形の平面形でカマドを有しており、擦文文化期の竪穴住居跡であるとみられる。床面から出土した土器をみると、宗谷管内にはわずかに続縄文文化期とオホーツク文化期の竪穴住居跡が含まれると考えられる。

一方、348か所の竪穴が発掘調査されているオホーツク管内では、平面形が明らかになった竪穴住居跡245軒のうち、方形が160軒(65%)、多角形が49軒(20%)、円形が36軒(15%)であった。また、カマドを有する竪穴住居跡が114軒(33%)、骨塚を有するものは28軒(8%)確認されている。

竪穴住居跡床面から出土した土器をみると、187軒のうち100軒(53%)から擦文文化の土器が出土しており、オホーツク文化の土器が38軒(20%)、縄文文化と続縄文文化の土器がそれぞれ24軒(13%)、擦文文化とオホーツク文化が融合したトビニタイ文化の土器が出土した竪穴住居跡も1軒(1%未満)ある。以上を総合すると、オホーツク管内の竪穴の50~60%程度は擦文文化期の竪穴住居跡で、オホーツク文化期と縄文・続縄文文化期に属するものがそれぞれ20%前後であると推測される。

発掘調査が実施された竪穴は、3管内の竪穴全体の4%程に過ぎないため、断定はできないものの、3管内の竪穴は主として擦文文化期の住居跡であるが、地域によって差異があり、他の文化の住居跡も含まれる、ただし、縄文文化までさかのぼるものは稀、と考えられる。

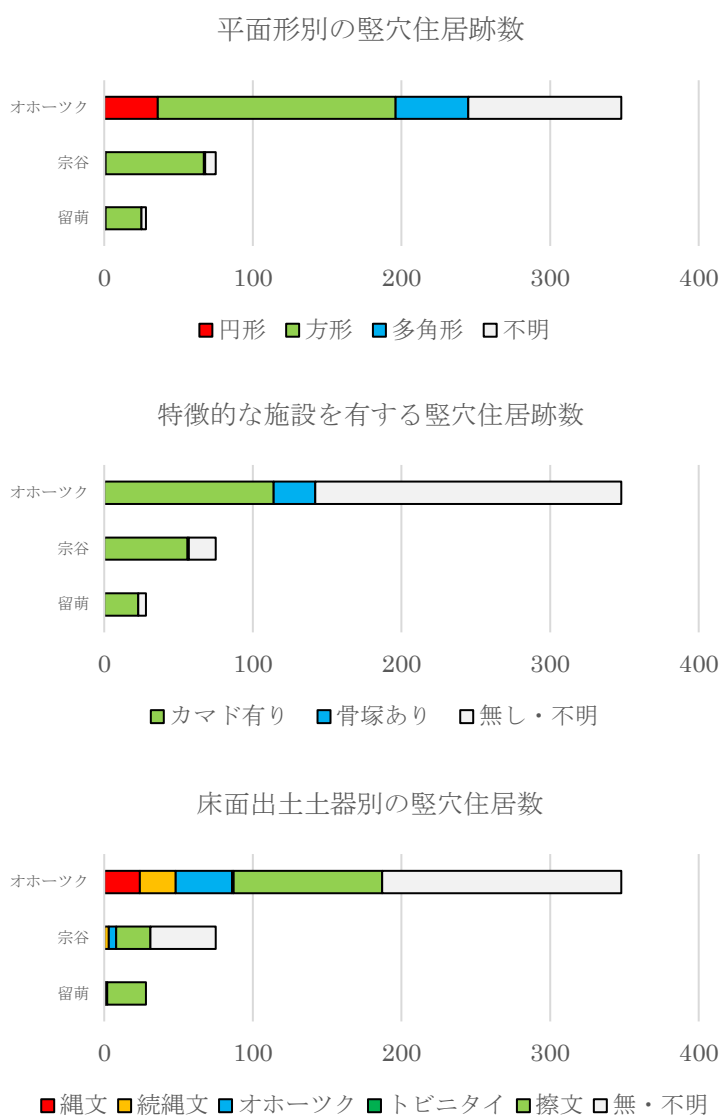


図5 平面形・特徴的な施設・床面出土土器別の竪穴住居跡数

(3) 竪穴群の規模と竪穴確認数の推移

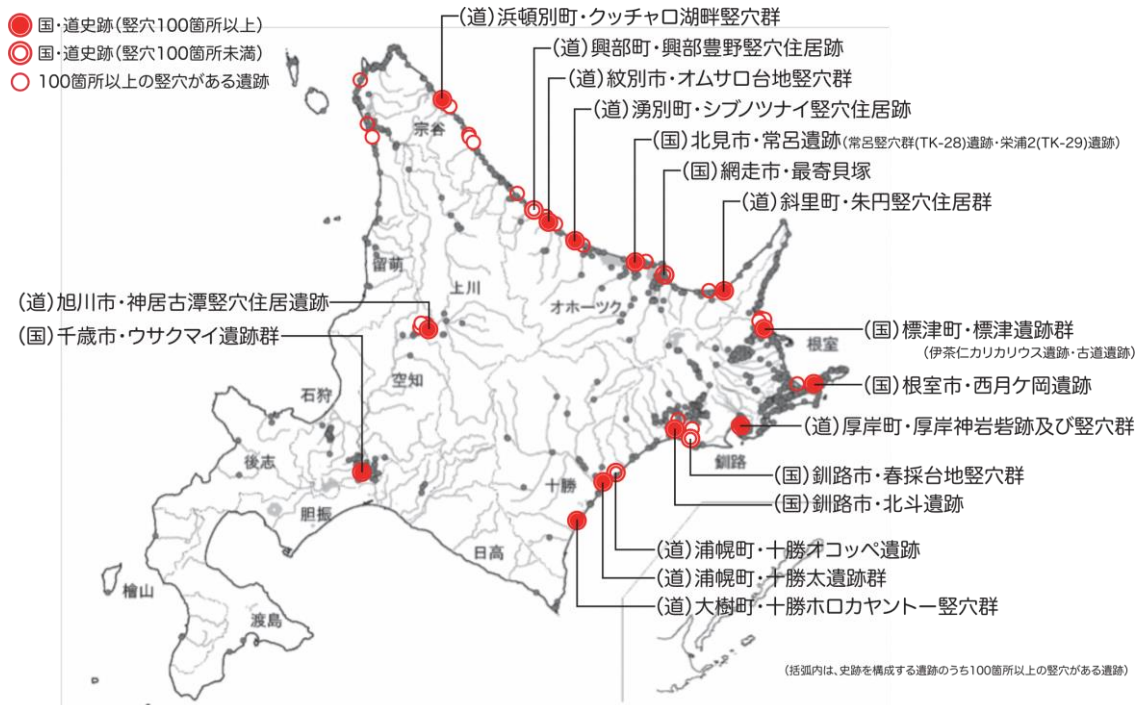


図6 国・道史跡の竪穴群と100箇所以上の竪穴がある竪穴群

北海道全体では、1,335遺跡で総数約23,000箇所の竪穴が記録されている。一つの遺跡で最も多くの竪穴が記録されているのは北見市常呂町栄浦2(TK-29)遺跡の2,030箇所である。

竪穴の総数が100箇所を越える大規模な竪穴群は37遺跡(竪穴群全体の約3%)で、道東・道北地域の河口や海に面した湖沼近くに立地するものが大半であるが、内陸部の千歳市や石狩川上流部にもまとまって分布する所がある(図6)。一方、規模不明を除くと、約9割の竪穴群が30箇所以下の竪穴で構成されており、竪穴5箇所以下が約半数を占める(図7)。測量調査が実施された竪穴群で竪穴の数が多い傾向があるが、窪みの多さから注目され、測量調査の対象になったことに加えて、測量にあたり丁寧な下草刈りが行われ、詳細に観察されることで更に多くの竪穴が見つかったということも考えられる。

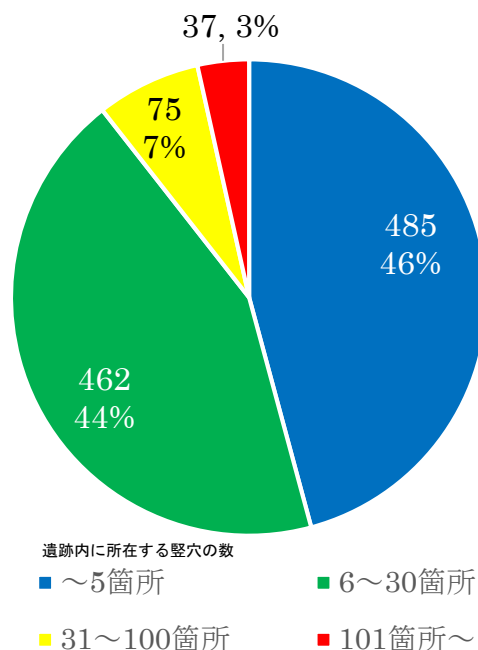


図7 竪穴群の規模(一つの遺跡に所在する竪穴の数)
(詳細不明除く)

なお、「数十個」や「無数の」、「かなりの数がみられる」のように具体的な堅穴数が記録されていない堅穴群も多い。さらに、「かつてみられた」等のように、堅穴の存在が過去のものとして記載されている例も多い。例えば、第2章で述べたように、札幌市の旧琴似川流域には、かつて860個の堅穴が存在していたが(高畑1897)、現在では、知事公館や北海道大学構内、北大植物園等でわずかに確認できる程度である。

オホーツク・宗谷・留萌管内のいくつかの市町村を例に堅穴確認数の推移をみると、稚内市では、1994～1998年に市教育委員会が実施した一般分布調査によって、47遺跡・330箇所以上の堅穴が発見されている。しかし、1980年代に道教委が実施した踏査の際に所在が確認できなくなっていた堅穴もかなりの数にのぼる(表1)。開発等によって遺跡が消滅したほか、保存されていたとしても堅穴の正確な位置情報が記録されていないために、踏査で確認できなかったというケースも少なくないと考えられる。

こうしたことから、現時点でいくつの堅穴が残されているのか、正確な数は分かっておらず、堅穴群の保護・活用にとっての課題となっている。

表1 稚内市・網走市・天塩町の年代別堅穴確認数

管内 市町村	遺跡名	年代別の堅穴確認数							
		不明	～1939年	～49年	～59年	～69年	～79年	～89年	99年～
宗谷 稚内市	シュブントー				33	21		30+	21
	オンコロマナイ				3			10	
	恵北1					10+		10+	
	声間川大曲		10+					不明	
	恵北2		9					×	
	声間貝塚		2	×					
	オニキリベツ1	6						×	
	オンコロマナイ3							11	
	ユール							20+	
	高塚							3±	
	ボンチャシュナイチャン跡							1	
	苗太路							○	
	泊内川右岸	20						不明	
	豊岩1						3	3	
	泊岸1号チャン跡							1	
	増穂川口							1	
	増穂チャン								13
	シュブントー2							7	8
	声間川左岸2		10±					×	
	瑞内3							1	
	富嶺3							○	
	豊岩8							12	
	豊岩9							8	
	境の川右岸1								10+
	境の川右岸2								20+
	境の川右岸3								7±
	境の川右岸4								10±
	境の川右岸5								1
	オネトマナイ川左岸1								4
	オネトマナイ川左岸チャン跡								1
	勇知川左岸1								1
	勇知川左岸2								10+
	抜海砂丘第1								○
	抜海砂丘第2								○
	抜海砂丘第3								1
	クトネベツ川左岸1								100+
	クトネベツ川右岸1								10+
	クトネベツ川右岸2								10+
	クトネベツ川右岸3								10+
	クトネベツ第1チャン跡								○
	クトネベツ第2チャン跡								2±
	ルエラン砂丘第1								○
	ルエラン砂丘第2								8
	声間大沼丘陵第1								○
	声間大沼丘陵第2								○
	声間大沼丘陵第3								○
	声間大沼丘陵第4								○
声間大沼丘陵第5								○	
声間大沼丘陵第6								1	
声間大沼丘陵第7								○	
声間丘陵下第1								○	
声間丘陵下第2								○	
声間丘陵下第3								10+	
声間丘陵下第4								10+	
声間川大曲第2								1+	
稚内高校グラウンド		36						○	
ウヰンナイ川左岸								10+	
増穂川右岸段丘第1								10+	
増穂川右岸段丘第2								10+	
追久間内川左岸段丘第1								10+	
追久間内川左岸段丘第2								10+	
富嶺小学校裏								○	
増穂旧神社								1	
オンコロマナイ5					1	1		1	
泊内川左岸2								1	
シュブントー3								5+	
シュブントー5								○	
シュブントー7								7	
シュブントー8								5	
網走市	シュブントー9								3
	声間大沼丘陵第9								○
	クトネベツ右岸4								5
	浜勇知1								2
	メクマ2								1
	切通	○							×
	旧大曲神社								×
	大曲西山牧場	○							不明
	クツネロ2					7			×
	フトセウシナイ2					6			×
	フトセウシナイ					5			×
	呼人チャン					○			9
	湖荘					12			×
	最寄貝塚		28	23					×
	明治部落								1
	ニツ岩							8	8
	樺野								不明
	ボンモイ					○			×
	ニカル					○			×
	イナウシ					○	○		23
	呼人					○			9
	桂岡					○			×
	バイラギ							○	1
	オシヨツ					3			×
	NM-01							16	4
	NM-04						13		?
	NM-05								?
NM-06								?	
NM-10								7	
NM-11						○		10	
NK-02								6	
能取岬西岸								5	
NK-02								1	
音程内2								5	
浦士別3						○		2	
美峠								3	
明治第1								3	
湖荘2								○	
ビットカリ								7	
喜多山キャンプ場								3	
喜多山								○	
オヨロの沢								9	
喜多山4								6?	
向陽3								3?	
湖市1								4?	
美峠4								2	
美峠5								11	
美峠6								2	
タンネンナリチャン								3	
天塩川口				400±	400+			230	
チセニモヒ				○					
千拓1				○					
作返1							17	×	
作返2							5	×	
作返6							3	×	
雄信内1							4	4	
雄信内2							3	×	
雄信内3							4	×	
雄信内4							3	×	
雄信内5							5	×	
雄信内6							5	5	
更寄海岸	○							不明	
SR-4							3	2	
川口基礎B								3	
トウウツ川右岸								4	
天塩川口チャン跡								4	

○: 具体的な数は不明だが堅穴の所在を確認
 □: 消滅または所在不明になった堅穴群

(4) 北東北の竪穴群

地表の窪みとしての竪穴群がみられるのは、北海道だけではない。青森県・岩手県・秋田県の北東北でも、主に奈良・平安時代の竪穴群があり、一部は県の史跡に指定されている。

青森県では六ヶ所村富ノ沢(1)遺跡等では縄文時代の竪穴住居跡も窪みで確認されているが、奈良・平安時代になり遺跡数・竪穴数とも増加し、六ヶ所村の湖沼周辺では浅い窪みが数多く確認されている(福田 2015)。また、岩手県では古くから竪穴群の調査・報告がある(草間 1967・1970 等)。

青森県・岩手県・秋田県で確認されている主な奈良・平安時代の竪穴群をまとめた(表 2)。北海道と比較して大規模竪穴群が無く、窪みも浅い傾向があり、空堀で囲まれる、山頂部に位置するなど「高地性集落跡」「防御性集落跡」と呼ばれる事例が多い。岩手県・秋田県では昭和 29(1954)年～34(1959)年に指定された県史跡がある。今後は北海道の竪穴群との比較・研究も必要である。

表 2 北東北の主な奈良・平安時代の竪穴群(指定史跡及び竪穴 30 以上とされる遺跡)

県	市町村	遺跡名	竪穴数	備考
青森県	六ヶ所村	追館遺跡	33	
同	同	鷹架沼竪穴遺跡	43	
同	七戸町	砂小田館跡	80+	
同	十和田市	六日町遺跡	30+	
同	おいらせ町	下谷地(1)遺跡	52	
同	五所川原市	福島城址	32	
同	鱒ヶ沢町	大館森山遺跡	30+	
岩手県	野田村	野田竪穴状居跡群	185+	昭和 29(1954)年 4.5 県指定
同	九戸村	黒山の昔穴遺跡	22	平成 19(2007)年 10.26 県指定
同	葛巻町	小屋瀬館跡	31	
同	岩手町	仙波堤竪穴住居跡	43	昭和 32(1957)年 7.19 県指定
同	岩手町	今松竪穴住居跡	24	昭和 32(1957)年 7.19 県指定
同	八幡平市	小屋の沢高地集落	30	ニッ森とも呼ばれる
秋田県	同	高野遺跡	65	
同	美郷町	鉢巻山	100?	昭和 34(1959)年 1.7 県指定

(福田 2015 の他、青森県教育委員会佐藤智生氏・斉藤慶史氏、岩手県佐藤嘉広氏、秋田県教育委員会新海和広氏のご教示による)

4 竪穴群の特徴

竪穴群は、その大半が埋まりきらずに地上に窪みとして残った竪穴住居の跡である。北海道内では、縄文時代早期から竪穴住居の存在が明確になる。最も新しい竪穴住居跡の事例は、平成 29 年度に標津町教育委員会が発掘調査を実施した同町ポー川河岸 3 遺跡の竪穴住居跡で、炉跡から検出された炭化材の年代測定結果では 13 世紀後葉～14 世紀後葉の年代値が得られている（北海道教育委員会編 2018）。また、幕末に天塩地方を警護した荘内藩士によって描かれた絵図には、天塩川口遺跡とほぼ一致する位置に竪穴住居様の表現が認められる（前田 2002）。このように、竪穴住居は縄文時代早期から擦文文化終焉後までの約 1 万年にわたり、一般的な家屋の形態のひとつであったと考えられている。

ただし、道央以西では続縄文時代の後半期の竪穴住居跡がほとんど発見されないなど、時期や地域によって、その様相は多様である。また、住居の構造についても、地面を掘って床を作るという点は共通するものの、掘り込み（竪穴）の形や柱の配置、炉やカマドの有無などは地域や時期によって異なる。傾向としては、ほとんどの時期で道南地域と道東地域では大きく異なっており、道南地域は東北地方北部と類似した変化をする。道央地域は道南地域と道東地域の中間的ではあるが、どちらかといえば道南地域に似た変化をする。また、サハリンで成立し、南下したと考えられているオホーツク文化と、本州の古代文化の影響を強く受けた擦文文化の住居の形式は、それ以前のものとは大きく異なる。

擦文文化とオホーツク文化は、北海道（及び隣接地域）に展開した文化であり、前章の通り、竪穴群においても両文化の住居跡が占める割合は高い。そこで、本章では両文化の竪穴住居と集落の概要を述べることにする。また、竪穴群に占める割合は低いですが、擦文文化とオホーツク文化が接触・融合して成立したトビニタイ文化の住居や集落についても紹介する。

(1) オホーツク文化の住居と集落

海獣狩猟や漁業を主な生業とするオホーツク文化の典型的な竪穴住居は、平面形が五角形ないし六角形を呈する。規模が大きいことから、地表の窪みを詳細に観察すると、五ないし六角形であることが確認できるものも多い。床の中央部を長方形に区画し、中心部には石組みの炉が設けられた部分からは黒曜石の剥片等が出土し、作業場でもあったようである。それらの周りをコの字形に粘土を張った床が囲み、粘土床と壁の間には板張りの構造物が設けられ、家事を行う場、寝所、あるいは道具の格納場所などにしていただと考えられている。また、「骨塚」と呼ばれる動物骨の集積が奥壁の近くに設けられることが多く、住居内でクマを中心とした動物儀礼が行われていた。住居の規模の大きさや焼失した住居の遺物出土状況等からは、複数の家族が 1 軒の竪穴住居に住んでいたと想定されている。

オホーツク文化の集落立地は、ほぼ海岸部に限られており、海洋への適応を示している。さらに、根室市弁天島貝塚竪穴群のような小島や、網走市二ツ岩遺跡のような崖上、斜里町チャシコツ岬上遺跡のような孤立丘といった、周囲から隔絶した地形、あるいは海上への眺望にすぐれた地形に立地するものが少なくない。

(2) 擦文文化の住居と集落

擦文文化は、続縄文文化が本州の国家勢力と接触する中で成立したもので、竪穴住居の平面形は東日本の古代の住居と同様に方形を呈し、内部には煙道のあるカマドのつくりつけられたものが多く、雑穀等も煮炊きされていたと考えられる。

発掘調査の行われた擦文文化期の竪穴住居跡のうち約 20%が火事に遭っており(村本 2007)、炭化した建築部材の形状や出土状況から、往時の姿の復元が試みられている。図 8 は小平町高砂遺跡の焼失住居跡(峰山・宮塚編 1983)と同住居の復元案である(峰山ほか 1982)。

擦文文化の遺跡は、海岸沿いのほか、湖沼や河川沿いに集中し、数百の竪穴からなる大規模竪穴群も少なくない。

藤本強は、この頃の集落には占地に関していくつかの規制があったが、最もきびしい規制は明らかに前代に竪穴住居があったと考えられる窪みを避けて竪穴住居を構築することであり、これに地点ごとの「先住権」ともいべき一種の所有関係が加わると、居住できる地点は時期が下るほど劣悪な場所になり、結果として多数の竪穴住居が作られることになったという考えを示した(藤本 1982)。

一方、瀬川拓郎は、擦文文化期に大規模な竪穴群が形成されたのは、当時の人々が遺体を住居に安置し、そのまま住居を放棄したことの累積によるものと考え方を示した(瀬川 2003・2016)。

(3) トビニタイ文化の住居と集落

9～10 世紀頃には、現在の網走市と釧路市を結んだラインより東側の地域では、オホーツク文化から擦文文化へと変容しつつある段階の文化であるトビニタイ文化が成立した。

トビニタイ文化の竪穴住居跡は、平面形が一辺 5～6m 程度の方形の平面形を呈し、擦文文化の

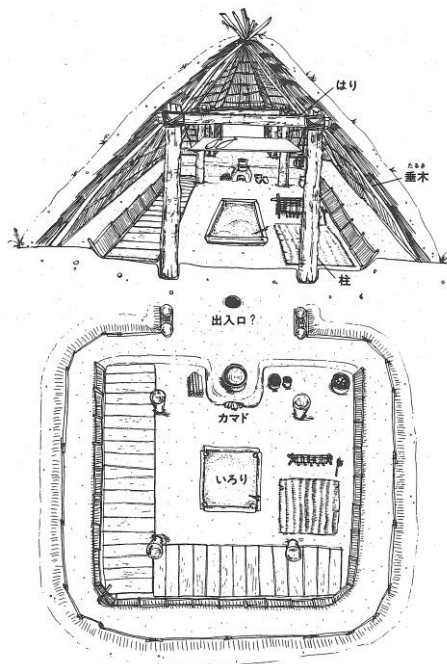


図 8 小平町高砂遺跡の焼失住居(上)と復元案(下)
(峰山・宮塚編 1983、峰山ほか 1982)

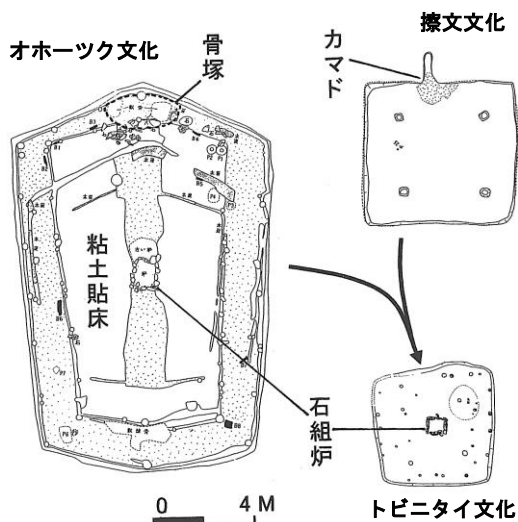


図 9 各文化の竪穴住居跡(澤井 2003 に加筆)

住居跡の形態に類似しており、1軒の家に居住する家族の在り方に変化のあったことが考えられる。火に関する施設は、オホーツク文化と同様に中央部に石組炉の設けられるものが多く、擦文文化の住居に一般的なカマドを作りつける例は少ない。オホーツク文化の集落が海洋を重視した立地であるのに対して、トビニタイ文化の集落は河川に沿った段丘上や内陸部という擦文文化と共通した立地のものもあり、河川や陸上の資源を獲得することが重視されるようになったことを示唆するものだろう。

(4) 竪穴住居から竪穴住居跡、窪みへ

竪穴の形成過程については、複雑なプロセスを経ていると考えられるが、ごく単純化すると、以下のように捉えることができよう(図10)。

a.竪穴住居は地面を掘り込んで床を作るので、一定量の排土が生じる。b.その一部は屋根に乗せられ、また、一部は竪穴住居の周りに盛り上げられたと考えられる。c.竪穴住居は居住が終了した後に解体されたり、あるいは放置されて朽ちたり、小平町高砂遺跡の例のように火災に遭うなどして、屋根が崩れ落ちる。d.放置された竪穴住居跡では、周りに盛り上げられた土が竪穴の中や外側に流れ出る。時間が経つほど周囲に盛り上げられた土が竪穴内に流れ込み、窪みとして認識し難くなる。また、洪水や火山灰の降下でも埋められていくし、後世にゴミ捨て場として利用されたり、開墾されたりすれば地面の凹凸はならされる方向に変化する。

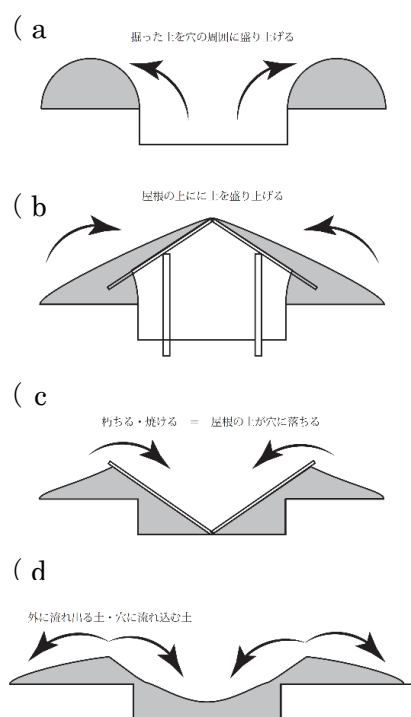


図10 竪穴住居から窪みへ

洪水や火山灰の降下、開墾等の影響が小さければ、こうした過程を経ることによって、およそその時間差を反映して徐々に埋まっていくことになるため、新しいものほど窪みは深く、本来の竪穴の形をしており、古いものほど浅く、円形や不整形になるか、窪みが消滅すると考えられる。それを示す事例として、縄文時代後期と擦文文化期の竪穴住居跡が調査された根室市穂香竪穴群では、縄文時代後期では60~70cm、擦文文化期では10cm程度が埋まっていた((財)北海道埋蔵文化財センター編 2002 ほか)。また、弟子屈町矢沢遺跡では縄文時代中期の竪穴住居跡で80~100cm、擦文文化期の竪穴住居跡で20cm程度、埋まっていた(弟子屈町教育委員会編 1977)。

こうしたことが、竪穴群に占める擦文文化とオホーツク文化の竪穴住居跡の割合の高さの理由とも考えられる。

5 竪穴群の保護

(1) 指定制度による保護

「保存法」の施行

かつては札幌市中心部にも、大規模な竪穴住居跡群が存在した。高畑宜一は明治 27(1894)年頃にその分布図を作成し、720 箇所にのぼる竪穴の位置を記録しているが(羽賀 1975)、その体系的な保護は試みられず、現在その大半が所在不明となっている。

その後、大正 8(1919)年に「史蹟名勝天然紀念物保存法」が制定・施行され、内務大臣(のち文部大臣)が重要な記念物を指定して現状変更を制限する制度が発足した。大正 10(1921)年に道庁は河野常吉らを委員とする「北海道史蹟名勝天然紀念物調査会」を設置して仮指定候補物件の調査に着手し、同年 6 月、北海道庁は史跡「神居古潭原住人遺跡」(現旭川市)の仮指定を行い、遅れて昭和 10(1935)年、「春採台地竪穴群」(釧路市)が文部大臣指定、「クサンルの竪穴群」(現稚内市)が道庁仮指定を受けた。昭和 11 年には「最寄貝塚」(網走市)が、大臣指定を受けている。

文化財保護法と保護条例

昭和 25(1950)年には旧保存法に代わって文化財全体の総合的な保護のための法制として文化財保護法が制定施行されたが、旧道庁の仮指定史跡は保護法による史跡にそのまま移行しなかった。ようやく昭和 32(1957)年に「神居古潭竪穴住居遺跡」が北海道文化財保護条例(昭和 28(1953)年制定)による史跡に指定されたが、もう一つの旧仮指定竪穴群である「クサンルの竪穴群」はその後指定を受けることなく、埋蔵文化財包蔵地の一部として周知されている。

昭和 30 年代末から 40 年代前半にかけ北海道文化財保護条例に基づく竪穴住居跡群の史跡指定が相次いだ(表 4)。これに与って力があつたのは昭和 36(1961)年に考古学の専門家として北海道文化財専門委員に就任した大場利夫であり、大場は道内の市町村教育委員会が郷土史解明のため盛んに実施した発掘調査を積極的に担当することを通じて、各地の竪穴群の実情を把握していた(中田 2016)。

しかし昭和 41(1966)年以降、大場博士が新設の北大文学部附属北方文化研究施設の教授としてオホーツク文化の研究を施設の主要なテーマとするようになると、道内竪穴群の実情把握と指定も一定の限界を迎える。また、道指定によって現状の変更は制限されても、さらに調査を進めて史跡の内容を正確に理解し、それを教育や研究に役立てるといった形で文化財としての価値を発揮させる作業は容易に進展しなかった。

竪穴群の記録作成は各大学が考古学研究の一部として推進していた。昭和 49 年に「常呂遺跡」(旧常呂町)が竪穴群としては「春採台地竪穴群」以来ほぼ 40 年ぶりに新たな国指定史跡となった際、その価値を証明したのは東京大学文学部常呂実習施設による正確な平面図や発掘の成果であり、昭和 51(1976)年には東京教育大学の調査成果を踏まえた根室市「西月ヶ岡遺跡」の国指定がこれに続いた。

(2) 記録保存から開発調整

大規模開発と緊急発掘

昭和 40 年代(1965 年～1974 年)に入ると、埋蔵文化財の保護に大きな変化が現れた。こうした大規模な公共事業が埋蔵文化財包蔵地に及んだ場合に、包蔵地を現状保存することはできないとしても、発掘調査を行って文化財の記録を残すことが一般化した。

昭和 50(1975)年の文化財保護法改正で公共事業に伴う発掘調査を地方公共団体が円滑に実施するための条項整備が行われた結果、竪穴住居跡群の大規模な記録保存が行われた千歳市末広遺跡(昭和 54～56(1979～81)年調査)、小平町高砂遺跡(昭和 55～57(1980～1982)年調査)、苫前町香川三線・同香川 6 遺跡(昭和 61・62(1986・87)年調査)や旧常呂町常呂川河口遺跡(平成 63～平成 14(1988～2002)年調査)などではいずれも地元市町村の教育委員会が調査主体となった。

公共事業に伴う文化財保護の目的で竪穴群の詳しい現状が調査された稀な例として、昭和 49(1974)年に行われた浜頓別町永和の竪穴群の測量調査がある(新岡・佐藤 1975)。これは国営草地改良事業と文化財保護の調整をはかるため、稚内開発建設部が竪穴群の正確な位置と範囲を示す資料を作成したものである。

周知資料整備とその限界

昭和 50 年の法改正では埋蔵文化財包蔵地の周知の徹底に努めることが国と地方自治体の責務として明示され、各自治体は従来厳密な規定のなかった「周知の埋蔵文化財包蔵地」の位置・範囲を、新たに公的資料に明示する必要に迫られた。北海道内でも昭和 47(1972)年から道教委が市町村と協力しながら分布調査を実施し、それまでに知られていた包蔵地を現地で確認するとともに新たな包蔵地の発見に努めた。

これにより昭和 60(1985)年までに、全道を網羅する埋蔵文化財包蔵地の周知資料が整備された。この資料には包蔵地の位置・範囲のほか遺跡の種別や時代などの情報が記載され、地表から確認できる竪穴住居跡群の把握がある程度可能になった。

とは言え周知資料整備の本質は、周知の包蔵地における土木工事等の届出という保護法上の責務が円滑に果たされるよう措置することにあり、周知資料には遺跡の種別・時代などは必ず記載されるものの、地表から確認できる竪穴の調査履歴、竪穴の規模・形態や配置、といった遺跡の内容や価値の判断に必要な情報は必ずしも記載されていない。そうした意味で我々の進める竪穴住居跡群調査では、周知資料からは読み取れない情報を利用できる新たなデータベースの整備が重要な目標となる。合わせて現地調査を推進し竪穴群の範囲を高精度に把握することが望まれる。

(3) 史跡整備

史跡整備と広域保存

昭和 49 年の約 1,043ha(現在は約 1,281ha)という広大な常呂遺跡の指定を皮切りに、国内他地域に類例の少ない道内竪穴群の特殊性と価値が再認識され、昭和 50 年代には竪穴

群の国史跡指定が相次いだ(表3)。このうち、釧路市「北斗遺跡」(昭和52(1977)年指定)は、市教育委員会が昭和48年度から平成8年度までの間、測量・発掘調査を実施し、指定後に土地を公有化して管理団体となり、公開のための整備を行った事例である。

また、文化庁は昭和52(1977)年から特定の範囲に多数の遺跡が存在する場合や遺跡の面積が広大である場合の保存方法を検討する、「広域遺跡保存対策」に関する調査研究事業を行い、標津町の遺跡群が国内初の検討対象となった。この成果により、昭和54(1979)年に史跡「古道遺跡」と伊茶仁カリカリウス遺跡が統合され国史跡「標津遺跡群」となり、同年これに接する「標津湿原」も天然記念物として国指定を受け、遺跡とその立地する環境が一体となって保護される稀有な事例となった。その後も両者の追加指定は続き、史跡は現在約4,149haと、国内で最も広大である。

国指定記念物整備に係る国庫補助制度を活用して、標津遺跡群では昭和55(1980)年にポ一川史跡自然公園、常呂遺跡では平成6(1994)年に「ところ遺跡の森」が開設され、平成25年度には網走市最寄貝塚の整備事業が完了し、来訪者が遺跡の内容・価値を具体的に理解できるよう整備されている。これに対し、指定・現状保存が先行した道指定の竪穴群の整備・活用例は、紋別市教育委員会が実施した発掘調査の成果をもとに、平成4(1992)年までに市民ボランティアによる復元建物の整備などが行われた紋別市オムサロ台地竪穴群があるが、その他はあまり進展していない。

重要遺跡確認調査

平成11(1999)年、道立埋蔵文化財センターが設置され、道教委の埋蔵文化財保護業務のうち調査研究・収蔵保管・普及啓発を実施することになった。その調査研究事業の一部として平成11年から現在まで継続して実施している「重要遺跡確認調査」は、北海道の歴史理解にとって重要でありながら未指定、あるいは保護が不十分とみられる遺跡を調査し、史跡指定の根拠ともなりうる、内容・価値を具体的に明らかにした資料を整備することが目的である。

平成17(2005)年からの5年間は幌延町と豊富町にまたがる音類(おとんるい)竪穴群の調査を実施した。日本海とサロベツ湿原に挟まれた砂丘に位置するこの遺跡は、日本海側に現存する竪穴住居跡群としては最も規模の大きいもので、調査

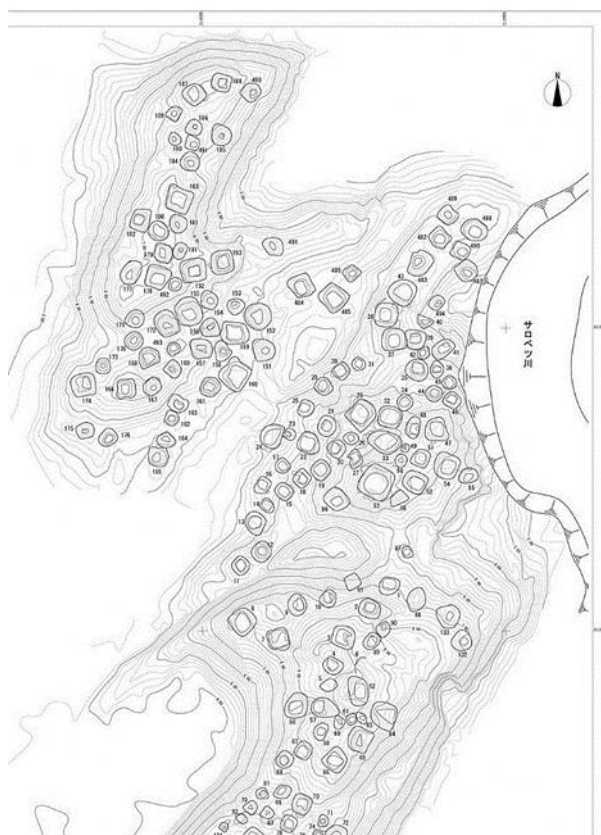


図11 音類竪穴群平面図(部分、1:2,500)
平成19年度 北海道埋蔵文化財センター作成

の結果、796箇所に住居跡と思われる竪穴を確認し、主要な区域の詳細な平面図を作成した((財)北海道埋蔵文化財センター編 2010、図 11)。遺跡が利尻礼文サロベツ国立公園の特別保護地区にあることから、発掘調査未実施で史跡指定には至っていない。同水系にある天塩川河口部の竪穴住居跡群(天塩町教育委員会編 1982)とともに今後、文化財としての保護が望まれる遺跡である。

平成 26 (2014) 年からは湧別町シブノツナイ竪穴住居群の調査を実施している。測量調査の結果、530箇所を竪穴を確認し、6カ所のトレンチ調査、関連資料調査等も行っている((公財)北海道埋蔵文化財センター編 2015 ほか)。

なお、常呂遺跡の竪穴群や、道指定竪穴群のいくつかは森林法等の保護を受け、開拓以前からの景観を保ってきており、周辺の環境・景観まで考慮に入れた、望ましい保護のあり方を考えていかなければならない。

表 3 国指定史跡の竪穴群

指定年月日	所在地	指定名称	備考
大正 10 (1921) 6. 12	神居村	神居古潭原住人遺跡	道庁仮指定、1957 年道指定
昭和 10 (1935) 11. 27	稚内町	クサンルの竪穴群	道庁仮指定、戦後未指定
昭和 10 (1935) 12. 24	釧路市	春採台地竪穴群	
昭和 11 (1936) 12. 16	網走市	最寄貝塚	
昭和 49 (1974) 3. 12	常呂町	常呂遺跡	
昭和 51 (1976) 6. 21	標津町	古道遺跡	1979 年、標津遺跡群に統合
昭和 51 (1976) 8. 28	根室市	西月ヶ岡遺跡	
昭和 52 (1977) 7. 14	釧路市	北斗遺跡	
昭和 54 (1979) 5. 22	標津町	標津遺跡群	
昭和 54 (1979) 5. 23	千歳市	ウサクマイ遺跡群	

表 4 道指定史跡の竪穴群

指定年月日	所在地	指定名称	備考
昭和 32 (1957) 12. 20	旭川市	神居古潭竪穴住居遺跡	1921 年道庁仮指定
昭和 39 (1964) 10. 3	紋別市	オムサロ台地竪穴群	
昭和 41 (1966) 7. 7	浜頓別町	浜頓別クッチャロ湖畔竪穴群	
昭和 41 (1966) 7. 7	大樹町	十勝ホロカヤントー竪穴群	
昭和 41 (1966) 7. 7	厚岸町	厚岸神岩砦跡及び竪穴群	
昭和 42 (1967) 6. 22	湧別町	シブノツナイ竪穴住居跡	
昭和 42 (1967) 6. 22	斜里町	朱円竪穴住居跡群	
昭和 43 (1968) 12. 18	興部町	興部豊野竪穴住居跡	
昭和 51 (1976) 5. 21	浦幌町	十勝オコッベ遺跡	
昭和 51 (1976) 5. 21	浦幌町	十勝太遺跡群	

6 おわりに

「北海道南千島の遺跡を見るに、其最も注目すべきものは竪穴である。」(鳥居 1903:213)

(1) 北海道の歴史・環境の理解と竪穴群

主要遺跡としての竪穴群

北海道の遺跡の種類は、見たところ国内の他地域に比べて少ない。宮殿の跡はなく、官衙や寺、城の跡も少ない。いわゆる古墳もないに等しい。ただこれは本質的に遺跡の多様性が乏しいというよりも、文献によって性格内容の説明できる遺跡が少ない、と考えたほうがよい。南西部の一部地域を除けば、文献にほとんど記録のない時代、つまり先史時代がわずか300年ほど前まで続いていたことが北海道の特徴である。どこにどのような人間の営みの跡があるか、ということは本を読んでもわからず、野外を歩いて遺跡を見つけ、その内容を調べることが北海道の歴史を理解するために重要な作業となる。

いわゆる竪穴群は、その意味で北海道の最も主要な遺跡であるといってよい。何しろすでに開発され遺跡がかき乱された土地を別にすれば、歩くだけで、地面の上からそこに遺跡があるとわかるのは、竪穴群のほかにはチャシ跡ぐらいしかないが、チャシ跡の多くはさほど古いものではなく、その性格内容もある程度は文献から説明できる。竪穴群にはそういう都合のいい文献がないのであり、その意味では、前節までに述べた分布の広さや数の多さ、年代の幅から言っても、竪穴群こそは北海道らしい、北海道の古代を代表する遺跡だと言えるであろう。

この40年ほど、道内でも毎年のように広大な面積でいわゆる緊急発掘が行われ、北海道の古代史もその成果を大いに利用して説明されるようになっていく。しかし、緊急発掘には時間と経費の制限が伴うのであり、その制限の範囲で遺跡から引き出せる内容には限界がある。また何より、発掘のあとで遺跡は失われてしまう。緊急発掘によって、地表から眺めていてもわからなかったどんな素晴らしい遺跡が明るみに出るにせよ、それはほとんどの場合見つかる端から消えていくのであり、将来の世代のために残すことはできない。

緊急発掘の成果をできるだけ活用しながらも、今一度、第2章で述べたような遺跡発見・記載の時代にまで立ち戻って、どのように先史時代の遺跡を把握し、どのように将来に向けて保存していくべきかを考えることが、北海道の埋蔵文化財の保護のうえで本来重要な仕事であると私たちは考えているのであって、そのためにまず道内、特に北海道東部に残されている竪穴群の現状の調査によりやく着手したところである。

寒冷な環境と竪穴群

土壌は既存の堆積物が物理的・化学的に変化して、発達した風化層で、地表面下の堆積物に向かって上方から下方へと発達していく。土壌層準の形成は複数の要因が関係していると考えられる。

竪穴が埋まるのは掘り出した土が侵蝕されて再び流れ込むから、あるいは新たな物質が

堆積するからであり、埋まらないのは侵蝕や堆積が進行しないからだ我々は考えている。他の地域より北海道に堅穴群がよく残っているのであるとすれば、それは大きな侵蝕や堆積の起こらない、安定した環境が他の地域よりも維持されてきたことを意味する。雨量の少ない北海道は雨水による侵蝕・堆積が比較的少なく、また根雪の期間には地表が固定され凍上からも保護される。いわゆる「寒冷な気候」の影響は大筋でこのように理解すべきだろう。もちろん地表の侵蝕・堆積の環境は植生とも関係する。深い森林が形成されることは地表が安定していることと同義であり、森林の中にある古代の堅穴群は、大筋でその土地の地表環境がいかに安定しており、またいかに長く安定したままであったかを示すものと考えてよいだろう。

近年、地球温暖化に伴う気象の変化が論じられており、北海道の降雨量は増加、積雪期間は短縮し、森林を破壊する暴風も増加する傾向が見られる。将来はこの地域の環境そのものに遺跡の保全を委ねること自体が難しくなってくるかも知れない。しかし少なくとも 20 世紀までの相当長い間、北海道の遺跡が火山の噴火などを別にして非常に安定した環境の下にあったことを堅穴群から読み取ってよく、そうした意味で堅穴群には天然記念物としての性格が含まれる可能性もあると思われる。

(2) 今後の保護の課題

現代の人為の影響

科学者の多くは上記のような近年の気候変動自体を人為の所産であると考えている。仮にそうでなくとも、人間の活動がこれまでいかなる自然の豪雨や暴風よりも森林環境の保全に悪影響を与えてきたことは否定しがたいであろう。今日我々は人為的な草地の中に堅穴群を見ることがあるが、それは本来森林の中にあったものが、草地化の当時あまり機械力を利用できず、ほぼ伐木だけがなされた結果として残っているのであって、今日通常の方法で草地を新規造成すれば、そこにある堅穴群は跡形なく消滅するであろう。実際、20 世紀後半に道内各地で大規模な造成草地がなされたことが現在確認できる堅穴群の分布に影響していると考えられる面がある。そして現在仮に堅穴の痕跡を残していても、営農効率向上のために草地の改良が繰り返される中、事実上牧草畑としての利用を諦めるのでない限り遺構を維持することはできない。

その目的が森林の維持にある場合でさえ、現代の人為は環境の安定を乱さずにはおかない。林業は近年大きく機械化し、かつての冬季造材のように地表環境を乱さずに操業することはほぼ不可能になっている。恒常的な林道の設営などなくとも、重機が「歩く」だけで堅穴を踏み潰すことはたやすい。堅穴群のある森林の範囲を明確に把握し、その区域の管理を保安林のそれに類したものにしないうちに、森林の中の堅穴群は近いうちに大幅に失われていくであろう。

現代の土地利用の中で堅穴群を保護していくことには、このように一定の経済的損失が伴うと考えられる。それを何らかの形で補償するのか、それとも保護によって別の価値を生

み出すことで埋め合わせようとするのか。堅穴群の調査を進めることは、こうした問題の存在をより鮮明にすることでもあり、調査の総合性に見合った大局的な対処の方針が求められることになるだろう。

古代の人為の理解

もちろん遺跡に影響を与える人為は現代のものばかりではない。古代人が自分の生活のために先人の建物の跡をかき乱していれば、堅穴群は良好な状態では残らない。皮肉な話ではあるが、堅穴群がよく残り、森林に覆われているということは、その集落がある時期以降捨て去られ、今日まで住む人がなかったということである。ある時代には多くの人が住んでいた以上、そこには生活のために良好な環境があったはずなのだが、その環境が変化したのか、それとも人間の側が環境に求める条件が変わったのか。それとも、道内の人口自体が大きく減少するような事件があったのか。そのような意味で堅穴群の形成がなぜ始まり、また終わるかという過程の調査は、北海道の古代史自体を理解する作業でもある。

またそもそも、この地域の古代人が常に堅穴を掘って生活していたというわけではない。3章2節で述べたように続縄文時代後半の堅穴群はそれほど顕著でない。同じ時期の墓地や貯蔵穴群と思われるものが多く見つかっているのを考えると、人が少なかったのではなく、堅穴式建物によらない居住が普通であったかのようにも思われる。このことは縄文晩期についても言えるだろう。一方、膨大な数の堅穴を残している擦文時代の建物は、先行する続縄文後半の建物ではなく、本州以南の建築の系統を強く引いている可能性が高く、北東北においても北海道と同様な堅穴群が確認されていることから、北海道とその周辺域における堅穴群の現象を巨視的に理解する必要がある(3章)。4章で紹介した藤本強(1982)による堅穴群の残り具合に関する仮説が北海道の周辺地域においても適用可能なのか、またはまったく異なるパターンを見出すことができるのか、遺跡が残される地点及びその周辺も含めた生態環境や、埋没の過程、さらには人為活動の影響を含めた検討がなお必要である。

また、堅穴住居の構築は土器の出現以降の現象であり、定住的な生活を意味するものとみなされているが(渡辺 1966 など)、擦文時代の堅穴は定住性そのものよりも本州との交渉を通じた鉄器の普及による建築労力の軽減と結びついているようにも思われる。さらにオホーツク文化の堅穴式建物については、サハリンやアムール川流域との交渉を抜きにして考えることはできない。

隣接地域との連携の可能性

こうした古代の人為をめぐる疑問は個別の遺跡を眺めていて理解できるものではなく、地域的にも年代的にもある程度広範囲の比較をしたうえで判断し説明しなければならない。堅穴群は北海道周辺では現ロシア領サハリン州などにも広く分布しており(Можжаев 2015 など)、その一部は上記のように内容の点でも道内の堅穴群と密接に関係する模様である。したがって道内の堅穴群を客観的に理解し、その文化財としての価値を説明するために道外はもちろん、国外まで視野に入れた情報の収集整理が必要になる。私たちの調査は徹底して進めることの容易なものではないと言わざるを得ないが、それは一方で調査の成果が

様々な他の地域の文化財の理解と保護にも寄与しうることを意味している。そうした意味で、国や学識経験者からの支援や助言も得ながら、北海道東部の竪穴群調査を適切かつ計画的に進めて行きたいと考えている。

上記のように北海道東部の竪穴群を歴史的・文化的に正しく理解するために、先史時代以来、密接な関係を有してきたサハリン州の竪穴群への理解が不可欠である。両地域が共有するこの文化財の価値を明確化・普遍化するため、北海道とサハリン州とが積極的に交流することが望まれよう。平成 29（2017）年には同州に不動産文化財の保存活用を担当する文化遺産保護国家監督局が設置され、すでに蓄積されてきた学術研究の交流に加えて、保護行政上の交流・協力を検討すべき状況が生まれている。道州の交流により形成された普遍的な価値にもとづいて、将来的には両地域の住民が、文化遺産としての竪穴群の保存・活用のため協力し、新たな文化領域における交流を創出することにもつなげていきたい。

一見単調な窪みの集まりに過ぎないようにも見える竪穴群の性質を理解し、それが他地域にはない環境と、古代人の多彩な営為の結果として今日に残ったユニークな文化遺産であることを明確に主張し、説得力をもってその保護を進めることが私たちの目標である。そして自分たちの住む土地に固有の文化遺産を保護することを通じて、北海道という土地に対する国内外からの理解の促進に寄与できるものと考えている。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1983『青森県の中世館跡』
- 旭川市教育委員会編 1984『錦町5遺跡』
- 厚真町教育委員会編 2014『オニキシベ4遺跡』
- 犬飼哲夫ほか 1963「北海道の文化財」を語る『北海道文化財シリーズ』第5集 総合篇
- 岩崎卓也・前田 潮編 1980『北海道東部地区における考古学的調査』『筑波大学先史学・考古学研究調査報告』I 筑波大学歴史・人類学系
- 上野秀一編 1979『K446遺跡』『札幌市文化財調査報告書』XX 札幌市教育委員会
- 大井晴男 1984a「擦文文化といわゆる「アイヌ文化」の関係について」『北方文化研究』第15号 北海道大学文学部附属北方文化研究施設
- 大井晴男 1984b「斜里町のオホーツク文化遺跡について」『知床博物館研究報告』第6号 斜里町立知床博物館
- 大谷敏三・田村俊之 1982『末広遺跡における考古学的調査』(下)『千歳市文化財調査報告書』VIII 千歳市教育委員会
- 大西信武 1972『常呂遺跡の発見』 講談社
- 大沼忠春 1996「北海道の社会と文化 7~9世紀」鈴木靖民編『古代王権と交流』1 名著出版
- 大沼忠春編 2004『考古資料大観』第11巻 続縄文・オホーツク・擦文文化 小学館
- 大場利夫・大井晴男 1976『香深井遺跡』(上)『オホーツク文化の研究』2 東京大学出版会
- 大場利夫・大井晴男 1981『香深井遺跡』(下)『オホーツク文化の研究』3 東京大学出版会
- 大場利夫・菅 正敏 1977「枝幸郡浜頓別町日の出遺跡調査報告」『北海道考古学会』第13輯 北海道考古学会
- 帯広市教育委員会編 1990『帯広・八千代A遺跡』
- 金盛典夫ほか 1981『斜里町文化財調査報告』I-須藤遺跡・内藤遺跡発掘調査報告書- 斜里町教育委員会
- 菊池徹夫・宇田川洋 2014『オホーツク海沿岸の遺跡とアイヌ文化』北海道出版企画センター
- 草間俊一 1967「野田村中平遺跡—土師器・須恵器伴出の堅穴住居址群—」『Artes Liberales』No.2
- 草間俊一 1970『岩手県岩手町仙波堤・今松遺跡』
- 釧路市教育委員会編 1998『史跡北斗遺跡整備事業報告書』
- 久保 泰ほか 1985『札前』 松前町教育委員会
- (公財)北海道埋蔵文化財センター編 2015『重要遺跡確認調査報告書』10 北海道立埋蔵文化財センター
- (公財)北海道埋蔵文化財センター編 2016『重要遺跡確認調査報告書』11 北海道立埋蔵文化財センター
- (公財)北海道埋蔵文化財センター編 2018『重要遺跡確認調査報告書』13 北海道立埋蔵文化財センター
- 河野常吉 1905「チャシ即ち蝦夷の砦」『札幌博物学会報』第1巻第1号 札幌博物学会
- 河野常吉 1908「非コロポックル論」『札幌博物学会報』第2巻第2号 札幌博物学会
- 河野廣道 1932「胆振国千歳村火山灰下の堅穴遺跡」『人類学雑誌』第47巻第5号 日本人類学会
- 河野廣道 1933「北海道式薄手縄紋土器群」犀川会編『北海道原始文化聚英』 民族工芸研究会
- 後藤寿一 1934「北海道の先史時代についての私見」『考古学雑誌』第24巻第11号 考古学会

- 後藤寿一 1935「北海道江別町の竪穴住居址について 江別調査報告第二報」『考古学雑誌』第 25 巻第 2 号 考古学会
- 駒井和愛 1959「古代アイヌの竪穴住居址」『考古学雑誌』第 44 巻第 3 号 考古学会
- 駒井和愛編 1963『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』上巻 常呂の遺跡 東京大学文学部
- 駒井和愛編 1964『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下巻 オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 別篇 網走モヨロ貝塚 東京大学文学部
- (財)北海道埋蔵文化財センター編 2002『根室市 穂香竪穴群』北埋調報 第 170 集
- (財)北海道埋蔵文化財センター編 2003『根室市 穂香竪穴群 (2)』北埋調報 第 184 集
- (財)北海道埋蔵文化財センター編 2006『釧路町 東陽 1 遺跡』北埋調報 第 230 集
- (財)北海道埋蔵文化財センター編 2010『幌延町・豊富町 音類竪穴群 II』『重要遺跡確認調査報告書』第 7 集 北海道立埋蔵文化財センター
- 西蓮寺健ほか編 1976『ウサクマイ遺跡群 preliminary report』千歳市教育委員会
- 西蓮寺健ほか編 1977『ウサクマイ遺跡群』千歳市教育委員会
- 札幌市教育委員会編 2008『K528 遺跡』『札幌市文化財調査報告書』86 札幌市教育委員会
- 澤井 玄 2003「トビニタイ文化」『北海道の古代 2 続縄文・オホーツク文化』北海道新聞社
- 澤井 玄 2008「一〜一二世紀の擦文人は何をめざしたか」榎森 進ほか編『アイヌ文化の成立と変容 ―交易と交流を中心として』上 岩田書院
- 澤 四郎・西 幸隆 1975「釧路湿原周縁の遺跡分布」『釧路湿原総合調査報告書』釧路市立郷土博物館
- 澤 四郎ほか 1984「道東海岸線の遺跡分布」『道東海岸線総合調査報告書』釧路市立博物館
- 梶田光明編 2011『史跡標津遺跡群・天然記念物標津湿原保存整備事業報告書』標津町委員会
- 梶田光明 2014『北方古代文化の邂逅・カリカリウス遺跡』『シリーズ「遺跡を学ぶ」』098 新泉社
- 梶田光明・梶田美枝子 1982『史跡 標津遺跡群 伊茶仁カリカリウス発掘報告書』標津町教育委員会
- 梶田光明・梶田美枝子 1988『標津の竪穴』X I 標津町教育委員会
- 瀬川拓郎 2003「住居と墳墓」『北海道の古代 3 擦文・アイヌ文化』北海道新聞社
- 瀬川拓郎 2005『アイヌ・エコシステムの考古学』(有)北海道出版企画センター
- 瀬川拓郎 2007『アイヌの歴史』海と宝のノマド 講談社
- 瀬川拓郎 2016『アイヌと縄文―もうひとつの日本の歴史』『ちくま新書』1169 ちくま書房
- 高畑宜一 1894「石狩川沿岸穴居人遺跡」『東京人類学会雑誌』第 103 号 東京人類学会
- 高畑宜一 1897「穴居跡」『札幌沿革史 全』札幌史学会
- 武田修編 1996『常呂川河口遺跡 (1)』常呂町教育委員会
- 武田 修 2006『常呂遺跡群』『日本の遺跡』13 同成社
- 田村俊之編 1994『丸山遺跡における考古学的調査』『千歳市文化財調査報告書』XIX 千歳市教育委員会
- 千葉大学文学部考古学研究室編 2005『北海道標津町伊茶仁ふ化場第 1 遺跡第 1 次発掘調査概報』同研究室
- 千葉大学文学部考古学研究室編 2015『北海道中標津町当幌川遺跡第 3 次発掘調査概報』同研究室
- 坪井正五郎 1887a「コロボックル北海道に住みしなるべし」『東京人類学会報告』第 12 号 東京人類学会
- 坪井正五郎 1887b「コロボックル内地に住みしなる可し」『東京人類学会報告』第 14 号 東京人類学会

- 天塩町教育委員会編 1982『天塩町における考古学的調査』天塩町教育委員会
- 弟子屈町教育委員会編 1977『弟子屈町矢沢遺跡調査報告』弟子屈町教育委員会
- 東京大学文学部考古学研究室 1972 『常呂』 弥生会
- 東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・常呂実習施設編 2012『トコロチャシ跡遺跡オホーツク
地点』東京大学大学院人文社会系研究科
- 鳥居龍蔵 1903「コロボツクルに就て坪井、小金井両博士の意見を読む」『太陽』第9巻第13号 博文館
- 中田裕香 2016「大場利夫と堅穴群」『北海道考古学』第52輯 北海道考古学会
- 新岡武彦 1930「本道石器時代最後の土器」『考古』第2巻第3号 忍路郡考古学研究会
- 新岡武彦・佐藤和利 1975「枝幸郡浜頓別町栄和堅穴住居跡群の測量調査に就いて」『北海道考古学』第11
輯 北海道考古学会
- 根室市教育委員会編 2017『北構保男氏所蔵資料目録一覧』同委員会
- 羽賀憲二 1975「札幌市・琴似川流域にあった堅穴住居跡群—明治中頃に作られた堅穴分布図について—」
『北海道考古学』第11輯 北海道考古学会
- 畑 宏明・大沼忠春 1988「環海の大地 北海道」陳 舜臣ほか編『図説検証 原像日本』③地方と中央
古代を彩る地方文化 旺文社
- 馬場 脩 1939a「考古学上より見たる北千島（一）」『人類学先史学講座』第10巻 雄山閣
- 馬場 脩 1939b「考古学上より見たる北千島（二）」『人類学先史学講座』第11巻 雄山閣
- 平川善祥 1995「浜頓別の先史時代」『浜頓別町史』（有）北海道出版企画センター
- 平川善祥・野村 崇編 1982『ニツ岩』『北海道開拓記念館研究報告』第7号 北海道開拓記念館
- 福田友之 2015「埋まりきらない堅穴住居跡雑感」『泥人形』第4号
- 藤井誠二編 2001『K39 遺跡 第6次調査』『札幌市文化財調査報告書』第65集 札幌市教育委員会
- 藤本 強 1979a『北辺の遺跡』『教育社歴史新書〈日本史〉』17 教育社
- 藤本 強 1979b「道東・常呂川流域の擦文文化」『季刊どるめん』22号 JICC 出版局
- 藤本 強 1981「擦文文化—北海道の先アイヌ文化—」『地学雑誌』 東京地学協会
- 藤本 強 1982『擦文文化』『教育社歴史新書〈日本史〉』36 教育社
- 藤本 強 1988『もう二つの日本文化』UP 考古学選書2 東京大学出版会
- 文化庁文化財部記念物課編 2017『埋蔵文化財関係統計資料』同課
- 北大調査団 1955「北大遺跡について」『北方文化研究報告』第10輯 北海道大学
- 北海道教育委員会編 2018『市町村における発掘調査の概要（平成29年度）』道教委 HP
- 北海道庁 1901『北千島調査報文』
- 前田 潮 1982「北海道天塩町における遺跡分布調査(1979—81年)」『北方科学調査報告』3 筑波大学
- 前田 潮 2002「北方民族の堅穴居住の廃止と狩猟採集民社会の崩壊」『オホーツクの考古学』『ものが語る
歴史シリーズ』⑦ 同成社
- 松浦武四郎 1861『久摺日誌』
- 松田 猛 2009『北斗遺跡』『日本の遺跡』34 同成社
- 峰山 巖・宮塚義人編 1983『おびらたかさご』 北海道留萌土木現業所・小平町教育委員会

- 峰山 巖・山田悟郎・宮塚義人・佐藤訓敏 1982 『おびらの文化財—小平町文化財シリーズ 2— オビラ
ウシュペツ遺跡』 小平町・小平町文化協会
- 宮塚義人編 1983 『おびらたかさご』 II 小平町教育委員会
- 宮塚義人 1983 「小平町高砂遺跡の調査」『考古学ジャーナル』 No.213 ニューサイエンス社
- ミルン, ジョン 1882 「コロポクグルすなわち蝦夷および千島列島の竪穴住民に関する考察」
Notes on the Koro-poku-guru or Pit-dwellers of Yezo and the Kurile Islands
“Transactions of the Asiatic Society of Japan” vol.10, pp187-198
(吉岡郁夫・長谷部学 1993 『ミルンの日本人種論 アイヌとコロポックル』 雄山閣出版 所収)
- 村本周三 2007 「北海道先史時代の火災住居跡集成」『セツルメント研究』 6 セツルメント研究会
- 最上徳内 1808 『渡島筆記』
- 八木光則 2011 「古代北日本における移住・移民」小口雅史編『海峡と古代蝦夷』 高志書院
- 山内清男 1939 「縄紋式以後」『日本遠古之文化』 補注付新版 先史考古学会
- 八幡一郎・増田精一・岩崎卓也編 1966 『北海道根室の先史遺跡』 根室市教育委員会
- 米村喜男衛 1932 「北海道網走町出土土器に就いて」『史前学雑誌』 第4巻 3・4号
- 米村 衛 2004 『北辺の海の民・モヨロ貝塚』『シリーズ「遺跡を学ぶ」』 001 新泉社
- 米村衛編 2009 『史跡最寄貝塚—平成 15~20 年度史跡最寄貝塚史跡等・登録記念物保存修理事業発掘調査
報告書—』 同委員会
- 羅臼町教育委員会 1978 『トビニウス川南岸遺跡』『羅臼町文化財報告』 3
- 涌坂周一 2004 「松則川北岸遺跡 12・13 号住居址出土木製品の出土位置に関する考察」宇田川洋先生華
甲記念論文集刊行実行委員会編『アイヌ文化の成立』 北海道出版企画センター 191~202 頁
- 渡瀬荘三郎 1886 「札幌近傍ピット其他古跡ノ事」『人類学会報告』 第1号 人類学会
- 渡辺 仁 1966 「縄文時代人の生態 住居の安定性とその生物学的民族史的意義」『人類学雑誌』 第74巻
第2号 日本人類学会
- Можаев А. В., 2015, О структуре древних и средневековых поселений острова Сахалин (на примере
поселения Тагуй-1). Учёные записки Сахалинского Государственного Университета, Вып.
XI/XII. сс.144-148.

北海道の竪穴群の概要

平成 30 年 9 月

編 集 北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課
発 行 北海道教育委員会
〒060-8544 札幌市中央区北 3 条西 7 丁目
TEL (011)-231-4111 (代表) (内線 35-626 文化財調査グループ)
FAX (011)-232-1869